

京都・智積院の名宝

サントリー美術館（六本木） 22. 11. 30～23. 01. 22

京都・東山に立つ「智積院」（ちしゃくいん）は、弘法大使空海からは始まる真言宗智山派の総本山で、室町中期に紀伊国（現在の和歌山県）の根来（ねごろじ）山内で創建された寺院は、豊臣秀吉政権の時代に一旦衰退したが、江戸初期に現在の地で再興されて、「長谷川等伯」と息子の「久蔵」が描いた金碧障壁画群も今日に伝えられている。本展では、国宝の《楓図》や《桜図》など、桃山絵画の精華ともいえる障壁画群を始めて寺外で公開し、《金剛経》（国宝）や《孔雀明王像》（重要文化財）をはじめとする仏教美術の優品から、近代京都画壇を代表する堂本の印象の《婦女喫茶図》までを一堂に展示している。

長谷川等伯 《楓図》（かえです） 紙本金地着色 壁貼付 全4面



中央に楓の巨木を描いた構図は、多分に「狩野永徳」の《檜図》を意識したものであるが、紅葉し始めた楓とその根元に彩られた草花は、「永徳」にも描けない優美で華やかで荘厳となって、当時の画壇に衝撃を与えたとされている。

長谷川等伯 《檜図》（ひのきず） 紙本金地着色 八曲屏風 一隻



巨大な檜樹は、まるで大蛇が窮屈な画面の中でのたうち回るようにくねっていて、画中の金雲は途切れることなく、画面を横断して激しい風を感じさせる。

ダイナミックで圧倒的な画風が、時代を席卷したい

わゆる「狩野永徳」様式の作品である。

「智積院障壁画の桜・楓図などは、まさに絢爛多彩の色の世界である。

しかも、その配色に極めて洗練された色彩感覚を示し、その点狩野派が土佐色彩を学んで、既に長い伝統を持つに拘わらず、尚鈍重な色感を持つのに対し、遙かに秀れている。」

山根有三：「等伯研究序説」1950年より